

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

雪ノ下雪乃の短編集

【作者名】

to110

【あらすじ】

ただひたすら雪ノ下雪乃をメインとして書いていく物語
彼女の頑張りをご覧ください

雪ノ下雪乃の成長

「ふう……………」

勉強も一区切りついたのだし、少し休むとしましょう。奉仕部は一学期の終了と一緒に活動がなくなったので、しばらくの間、みんなに会っていない。去年は私にとっては凄く変化した一年だったわ。そして、今までで一番楽しい一年だったわ。いきなりドアが開いてそこからかしら。

いつも一人でいた部室に、比企谷君がやってきて、平塚先生が彼を入室させて。部室が二人の空間になって、でも、彼が私を見るのはあいさつするときと、私が話しかけたときだけ。少し寂し……………いえ、なんでもないわ。由比ヶ浜さんもそのあとに入室して、三人いて違和感のない空間になっていったわね。由比ヶ浜さん、ちゃんと受験勉強……………夏休みの課題やってるかしら。心配ね。彼は、問題ないと思うけれど、多分怠惰に過ごしているのでしょうか。……………その時間に電話くらいかけてきてくれてもいいのに……………」

そういえば、彼の誕生日って今日だったわね。何かあげようかしら。でも、彼の趣味って知らないのよね。何か買いに行こうかしら。今日やるべきことは終わったのだし、息抜きがてら探してみましよう。

「……………えっ」「ピクッ」

今、何か変な感じがしたのだけれど。気、気のせいよね。別に怖いとかそういうわけではないのだけれど、だれだっっていきなりへんなものを感じとったら、少しくらい驚くものよ。一般的に考えて驚くことが普通よ。別に幽霊が出たとかそういうことが怖いだなんて、ちつとも、ちつとも思っていないのだし、そもそもそんな非科学的なもの

がこの世の中にあるわけがないじゃない。そりゃあ、一般大衆の中には怖がりたりする人がいるけれど、私はちっとも、ちっとも怖くなんてないもよ。

早く出ましよう。いえ、怖いからとかではなく、時間を有効的にかつ無駄がないように動かないといけないというだけよ。幽霊が怖いから早く家から出たいとか、そういうわけではないのよ。

っと来てみてわかったのだけれど、このデパートって、凄く道が入り組んでいるのよね。少し、ほんの少し、迷ってもおかしくないわね。

「おーい、雪ノ下ー」

振り返ってみると、死んだ魚の目をした比企谷君がいた。あ、会えて嬉しい。けど、彼に悟られてはいけない。平静を保たないと。でも、頬が少し上に浮いていく。それから、顔が少し紅くなっている気がする。

八幡「顔、紅いぞ。熱でもあるのか？」

雪乃「紅いかしら。だとすれば、あなたのせいね。あなたの比企谷菌のせいで、紅くなっているだけね」

比企谷君のせいなのは事実なのだから、嘘ではないわよね？彼に会うと、顔が紅くなる。どうしてそうなるかを、私はもう知ってる。けれど……

八幡「……………ねえ、久々に会ったのに、何でこんなに辛辣なの？そういう病気のなの？」

雪乃「あなたと一緒にしないでちょうだい」

八幡 「別に俺は病気じゃない。ところでなんで俺を呼んだの？」
雪乃 「え？呼んでいないのだけれど。遂に夢と幻の区別がつかなくなってしまったのね」

八幡 「いやそれどっちも現実じゃないじゃん。雪ノ下さんが電話で――――」

『ひゃっはるー』

八幡 「なんですか？」

『あれ？私が誰だかわかるの？』

八幡 「あなたほど怖い人はいませんから」

陽乃 『またまた。やっぱり面白いな。君は』

八幡 「んで、何の用ですか？俺、これでも受験生なんですけど」

陽乃 『ん。実はね。雪乃ちゃんがデパートで待ってるから来てほしいってさ。いってあげてね？』

八幡 「面倒くさいんですが」

陽乃 『じゃあ、いってあげたらNAXコーヒーを30個あげ
八幡 「喜んでいかさせていただきます」……………人が話してるのに遮ったらダメだよ？』

八幡 「NAXコーヒーにはどんな社会通念も通用しません」

陽乃 『んじゃ 今 デパートの二階の奥の方にいると思うから、よろしく〜』

—————ってことだったんだが」

雪乃 「ちょっと待って。まず、私がそんなこと姉さんをお願いするわけないじゃない」

八幡 「いや、そんなことはわかってんだが、見事に餌があったものでござ？」

雪乃 「まあ、えっとそんなことよりも 今日 プルルル八幡「はっ」

八幡 「あーはいはい。わーったよ。今から帰るよ」

八幡 ガチャ「あー 悪い。小町が家で待ってるからそろそろ帰るな。用も特にないようだし」

雪乃 「どうしたの？家出は連絡を絶ってからやるものでしょう？」

八幡 「何が好きで愛する小町からの誕生日の祝いをしてもらえる日に家出せにゃあかんのだ。俺の誕生日今日なの覚えてないだろ？」

雪乃 「覚えているわ。プレゼントはないけれど」

八幡 「いや、そっいう嘘はいいよ。んじゃ」

雪乃 「待って。プレゼントをあげたら、覚えていたと認めてくれ

る？」

八幡 「まあな。でも、用意してないんだろ？」

雪乃 「いいえ、ずっと前からあなたにもらってほしいものがあつたわ」

八幡 「へ〜。そんなものが。んで、くれるのか？」

雪乃 コクッ

八幡 「ありがとう。それは今家か？」

雪乃 「いいえ、今あるわ。あなたの目の前に」

八幡 「……………何もねえぞ」

雪乃 「だから……………その……………あげたかったっていうのは……………わ……………わた……………」 / / /

八幡 「悪い。全然聞き取れん」

雪乃 「だから……………こついうことよ！」

そう言っつて私は彼に抱きついた。

八幡 「……………えっ？えっ？えっ？えっ？」

雪乃 「だから……………あなたにあげたかったのはわ……………私……………」 / / /

自分でもわかる。凄く顔が紅くなってる。顔が熱い。そして凄く恥ずかしい。生まれて初めて好きになった人で、そして、初めての告白。こんな思いなのね、恋って。そしてそんな彼の顔を見たら、彼の顔も紅くなってた。それで、そんな彼から発せられる言葉は――

八幡「えっと……………っ、つまり……………どういうことだ？」

――相変わらずだった。彼らしいといえばそうなのだけれど。だから、改めて言葉に。

雪乃「はつきりと言葉にしないと伝わらないようだからします。比企谷君、あなたのことが好きです。私と、付き合ってください」

はあ、言っちゃったわ。言い切ったわ。でも、多分彼は由比ヶ浜のことが好きなのでしょう。仕方ないわ。今まで散々なことを言ってきたのだから。でも、これで後悔はしない。初恋をできたんだもの。それで、その相手に告白をしたんだから。だから後、八幡「俺も好きだ」「悔はしな……………え？」

八幡「俺も雪ノ下のことが好きだ。だから、付き合ってくれ」

雪乃「由比ヶ浜さんじゃなくて？」

八幡「何言ってるんだ？」

雪乃「いいえ。なんでもないわ。じゃあこれからよろしくね、は……………八幡」

思ってた以上に名前と呼ぶことって難しいのね。彼だって言えないに決まっている。だから、気にすることではないわね。

八幡 「よろしくな。ええと……………ゆ 雪乃」

彼が名前を言えるだなんて。驚きが隠せないわ。なぜ彼が言えて私と言えないのかしら。なんだか非常に悔しいわ。

八幡 「ん、まあ、最高の誕生日だ。今までの中で。ありがとな」

そうね。誕生日だったわね。頭が真っ白になっていたわ。もう一つプレゼントをあげるとしましょうか。

彼に近づき、彼の唇に。彼は驚いていたが、そのあと、目を瞑ってくれた。受け入れてくれた。うてこといいのよね。さて、最後の行動よ。

雪乃 「誕生日おめでとう。八幡」ニッコ

八幡 「ありがとう、雪乃」フッ

そして、その夜。

「ひゃっはろー、雪乃ちゃん」

雪乃 「姉さん……………」

陽乃 「ほらほら、お姉ちゃんに言うことあるでしょ？ほらほら、言いなさいよ」シンシン

雪乃 「はあ……………。姉さんのおかげで比企谷君と付き合うことになりました。ありがとうございます」

最大限に嫌さを演出した私の話をうんうんとうなづきながら姉は言う。

陽乃 「いや、比企谷が私の弟になるのか。楽しみだな」

そのことを考えてなかったわ。彼の精神もつかしら………
まあ、でも、今日から私に恋人ができたわけだけれど、恋人って、何をするのかしら………

結局、彼とはなんだかんで変わらない気がするわ。まあ、彼もわからないでしょうし、特に気にすることではないわね。これが私の一年での成長。大きな成長。私も彼もいい方向へ成長している。このまま、どこまでいくのかしら。

陽乃 「あつ。それから雪乃ちゃん」

雪乃 「まだ何か？」

陽乃 「おめでとっ」「ニッコッ」

雪乃 「あ………ありがとう」

多分、初めて心の底からの感情を姉さんに見せた。

part 1

雪乃「ギユウー

八幡「ペラッ

雪乃「ギユウー

八幡「ペラッ

雪乃「ギユウー

八幡「なあ雪ノ下」

雪乃「あら？何か雑音が聞こえたわね」ギユウー

八幡「そりゃあ外では部活やってるやつらが音を出してるからな」

雪乃「あらまた」ギユウー

八幡「(知ってたよ。俺のことだったのは知ってたよ)」

雪乃「それで、何かしら？」ギユウー

八幡「ん？何が？」

雪乃「用があったんじゃないの？」ギユウー

八幡「今日って由比ヶ浜来ないのか？」

雪乃「由比ヶ浜さんのストーカーかしら？」ギュー

八幡「ちげーよ（べべべ別にチラチラ由比ヶ浜を見たりとかしてないし？）」

雪乃「そうよね。ストーカーなら由比ヶ浜さんの動向を知ってるものだものね」ギュー

八幡「そういうことだ」

雪乃「そういうことって……あなたもしかして経験者？やめて、こっちを見ないで！」ギュー

八幡「（見たくて見てるわけでもない。だいたい、こいつないじゃん）」

雪乃「ちなみに由比ヶ浜さんは家の用事があるそうよ。メールきてないのかしら？」ギュー

八幡「ん？あ、ほんとだ、きとる。携帯なんて滅多に確認しねえからな。気づかないわ」

雪乃「メールも電話もする相手がいないものねっ」ギュー

八幡「……………ねえ、なんでそんな嬉しそうな笑顔なの？泣いちゃうよ？」

雪乃「あなたの泣き顔なんて見たら失明してしまうわ」ギュー

八幡「俺にそんな能力ねえよ……………」

雪乃「(でも、見てみたいかもしれないわね)」ギユウー

八幡「ペラッ

雪乃「ギユウー

八幡「なあ雪ノ下」

雪乃「何かしら？ ついに欲求を我慢できなくなってしまったのかしら？」「ギユウー

八幡「我慢できなくなったら襲っぞ、ほんと」

雪乃「襲うのは勝手だけれどもそのあとどうなるかは知らないわよ？」「ギユウー

八幡「それは怖い(てか、襲っていいのかよ……………」

雪乃「(私は、襲われても構わないもの……………」「ギユウー

八幡「……………それで、なんで本読んでねえの？ いつも読んでるのに」

雪乃「いつも？ そんなに私のことを見てるのかしら、このストーリーカーさん？ (別に嬉しいだなんてこれっぽっちも思っていないわよ)」ギユウー

八幡「そりゃあ部室に限られた人数しかいないのに見ないわけないだろ。ストーリーカー的な意味ではなく(様になってるからつつい見ちゃうんだよ)」

雪乃「そう」「ギユウー

八幡「んで、読んでない理由は教えていただけるのでしょっか？」

雪乃「本を読み終えてしまったのよ、持ってきた本全部」ギユウー

八幡「何冊だ？」

雪乃「2冊」ギユウー

八幡「2冊か（そのくらいなら頑張ればギリギリいけそっだな）」

雪乃「を3周」ギユウー

八幡「（はいおかしいですね。結果だけみれば6冊読んでますよ。何してんの？授業中読んでんの？）」

雪乃「ふふん」ギユウー

八幡「（得意げだな。てか、機嫌がいいな、今日は）」

雪乃「」ギユウー

八幡「」ペラッ

雪乃「」ギユウー

八幡「」ペラッ

雪乃「」ギユウー

八幡「……………なあ雪ノ下、なんで俺に抱きついてんの？」

雪乃「え？なんですって？」ギユウー

八幡「お前は難聴系主人公じゃないだろ」

雪乃「私がこうしていたいからよ。何か文句あるの？」ギユウー

八幡「なんでそんなに平静を保てるのかわからん。てか、本が読みにくいんだけど」

雪乃「頑張ればなんでもできる人よ、あなたは」ギユウー

八幡「やればできる人はぼっちになりません」

雪乃「憐れね」ギユウー

八幡「なら離れてくれませんか？」

雪乃「いやよ」ギユウー

八幡「なんなの？俺のこと好きなの？（あーやっちゃまったなーこれ悪手だなー俺の人生いつたいどうなるのでしょうかー）」

雪乃「／／／」ギユウー

八幡「（……………あれ？なんで返事がこないの？てか抱きつく力が強くなった。……………まさかこいつー！）」

八幡「なあ雪ノ下。」

雪乃「／／／」ギユウー

八幡「そんな攻撃でも俺は精神的ダメージを負わないぞ」

雪乃「へ？」ギュー

八幡「そうやって俺を精神的に追い詰める算段だろうが、あいにく俺にその手は通用しない。残念だったな」

雪乃「……………あなたは相変わらずね」ギュー

八幡「ペラッ

雪乃「そろそろ終わりましたよっか」スッ

八幡「(やっと腕が解放された) ああ、そうだな」

雪乃「(ここまで鈍感なのはなぜかしら？この人に対する今までの接し方が問題なのかしら？でもこれ以外の接し方なんて知らないもの……………」

八幡「(声漏れてますよー。ここで勘違いはしない。勘違いするのは材木座のようなぼっちの未熟者だけだ)」

雪乃「また明日ね、比企谷君」

八幡「じゃあなー」

雪乃「(次はどうやってアプローチしようかしら……………)」

part 2

雪乃「今日は比企谷君と一緒に夕食ご飯を食べましょう」

雪乃「(由比ヶ浜さんは今日は三浦さんと食べるといいうことなのだし、ちよつとよかったわ)」

雪乃「ここが比企谷君がいつもいる場所……(風も心地よくていい場所ね)」

雪乃「(それでは先にお邪魔して……) あれは……」

ニヤー ニヤー ニヤー

雪乃「ねこ……」キョロキョロ

雪乃「(だれもないようね。それでは)」テクテク

雪乃「にゃー」ナデナデ

ねこ「にゃー」

雪乃「にゃー」ナデナデ

ねこ「にゃー」

雪乃「にゃー」ナデナデ

ねこ「にゃー」コロコロ

雪乃「にゃー」ナデナデ

ねこ「にゃー」スピー

雪乃「あら、寝てしまったの……………」

雪乃「(私もそろそろご飯食べないといけないわね。あら？なぜここにいるんだっただかしら……………」

雪乃「は！ま、まさか……………」チラッ

八幡「よ、よう雪ノ下。き奇遇だな」

雪乃「い、いいつから、そそこにい、いるの？」

八幡「い、いやーほんと、今さっき。ついさっき。お前がねこと戯れてるところとか知らない(はい。言っちゃったぜ！俺の命が尽きるぜ！さらば小町！最後に小町の名前が出るあたり、いい兄である)」

雪乃「な……………な……………あ……………あ……………／／／」

八幡「と、ところでどうしてこんなとにいるんだ？(なんで恥ずかしくてんだよ。いつもの口撃はどこにいったんだよ。てか、かわいじゃねーかよ)」

雪乃「な、なんでもないわよ」テッテッテ

八幡「(ほんとにあいつはなんでこんな場所にあんだ？さっぱりわからん)」

雪乃「(あーーもうーやだっ！あんなところ見られちゃうだなん

て。このあとにお昼ご飯と一緒にだなんてできないじゃないの。恥ずかしい……………」

—————

雪乃「（これから部活だから私は部室に居るのだけれど、どうやって比企谷君に会えばいいのかしら……………」

八幡「よ、よう……………」ガラガラ

雪乃「ひっ！比企谷君、こここんには（やってしまったわー！もうだめー！）」

八幡「（慌てすぎだろ雪ノ下……………めっちゃかわいいんだけど）」

雪乃「比企……………谷……………君……………？」

八幡「どうした？」

雪乃「声に出てるわよ……………／／／」

八幡「な！……………／／／」

雪乃「……………」アワアワ

八幡「……………」ポカーン

雪乃「とと、ところでゆゆ由比ヶ浜さんは？（もっやだ！もうお終いよ）」

八幡「ゆ、由比ヶ浜ならいつもどおり遅れてくるぞ（あの雪ノ下が

噛んだ、だと。どんだけ慌ててんだよ。ちくしょう、見た目どおりで
かわいいじゃねーかよ」

雪乃「そ、そう……………」

八幡「今日は本は持ってきたのか？」

雪乃「えっ？あ、あの、そそそうね。ちゃんと持ってきたわよ」

八幡「ふーん」

雪乃「あら？また抱きついてほしいのかしら？」

八幡（ちゃっかり立ち直ってるな）あーそうだな。美少女に抱きつ
かれて悪い気はしないからな」

雪乃「なら、やってあげるわ」スッ

八幡「ちょおいおいおいてまってまって待つんだ」

雪乃「やってあげるからおとなしくしな……………」

結衣「やつはろー」「ドーン」

雪乃「っ…………ゆ、由比ヶ浜さんこんにちは」

結衣「やつはろーゆきのくん。ヒッキーも」

八幡「おん」

結衣「ところでさーゆきのん」

雪乃「なにかしら？」

結衣「なんでヒツキーに近づこうとしてたの？」

雪乃「え？あ、そのね（まずいわ、非常にまずいわ）」

八幡「いや、それはだな」

結衣「ヒツキー、またゆきのんに変なことしたでしょ？」

八幡「いや、そんなことは断じて—————」

雪乃「ええ、そうよ。またこの男が私に」

結衣「ヒツキーきもーい」

八幡「（雪ノ下め……………）」

結衣「それよりゆきのーん」ギョウー

雪乃「暑いから離れてちょうだい……………」

八幡「おおお、百合空間が一瞬で形成されたぞ。さすがは百合ヶ浜と百合ノ下……………」

—————

雪乃「そろそろ終わりにしましょう」

結衣「じゃあねっ、ゆきのん ヒツキー 「フリフリ

八幡「ああ、じゃあな」

雪乃「さようなら、由比ヶ浜さん」

八幡「んじゃま、俺も帰るわ」

雪乃「ええ、さようなら。ええと、誰かしら？」

八幡「帰りくらいちゃんと名前で呼んでくれよ……………」

雪乃「はあ……………さようなら、比企谷君」

八幡「そこまで嫌そうに言うなや。泣くぞ？泣いちゃうぞ？」

雪乃「そんなことどうでもいいからもう帰ってちょうだい」

八幡「どうしてもよくないんだけど。じゃあな」

雪乃「ええ、また明日ね、比企谷君」

雪乃「(明日はお昼に飯を一緒に食べましょう。頑張りましょう)」

うだい」

陽乃「もう冷たいな。仕方ないから帰ってあげるよ」

雪乃「そうしなさい」

陽乃「あ！そつだ雪乃ちゃん。比企谷君は家庭的な料理の方が好きだよ」

雪乃「そう。はやく帰って」

陽乃「ばいばい」フリフリ

雪乃「比企谷君は家庭的なのが……」ボソボソ

雪乃「(比企谷君はまだかしら。今日は昨日みたいにねこに気をとられ-----)」

ニャー

雪乃「(我慢よ我慢)」

ねこ」「シユン

雪乃「(ねこ)……はーだめだめよ。昨日と同じ失敗だなんてだめよ」

ねこ」「テクテク

雪乃「よく耐えきったわ私。さて、あとは比企谷君が来るのを待つだけね」

雪乃「」

雪乃「」

雪乃「」

雪乃「キョロキョロ」

雪乃「(来ない、わね。今日は来ないのかしら……)」

八幡「(え?なんで雪ノ下がいんの?ついに俺の安らぎの空間すらも奪いに来たの?そんなに俺が邪魔なの?なんなの?だが俺も引き下がれない。俺の場所は俺が守る)」

八幡「よう雪ノ下」

雪乃「ひっ」ピクッ

八幡「(……えーなんなのー?俺の声って聞いた人に恐怖を与えるの?)」

雪乃「ここにちはひ、比企谷君」

八幡「どうしたんだ?こんなとこで」

雪乃「そ、それは……」モジモジ

八幡「ほんとにはいつ雪ノ下じゃねーんじゃねーのか?最近明ら

かにかわいいと思える動作が増えてんだけど)」

雪乃「ひ、比企谷君と、いい一緒にお昼食べようと、思ったのだけれど……………／＼／」

八幡「……………は？（あーこれはあれだな。確信が持てる）」

雪乃「ど、どうかしら？」

八幡「体調崩したのか？」

雪乃「急に、どうしたのかしら？」

八幡「いやだって体調崩してないとお前がそんなこと言うわけないじゃんっていうような発言だぞ。なんかの病気か？」

雪乃「確かに恋という病気だけれど……………」ボソボソ

八幡「なんだって？」

雪乃「な、なんでもないわ。それよりもどうなのかしら？」

八幡「なにがだ？」

雪乃「お昼ご飯よ」

八幡「んーまあ時間もないしな。仕方ないか」

雪乃「と、ところで……………」

八幡「ん？」

雪乃「お弁当、作ってきたのだけれど……その……食べてくれない……かしら……？／＼／」

八幡「……………毒殺？」

雪乃「そんなわけじゃない。あなたのために作ってきたのだから／＼／」

八幡「うっ……………そ、そうか。ならいただきます」

雪乃「ど、どうぞ」「ハイッ

八幡「おお……………」モグモグ

雪乃「ど、どうかしら……………」？

八幡「うまい、というかつまい以外のコメントができないくらいなんだけど（唐揚げやら卵焼きやらで俺の好きなやつばかりだし）」

雪乃「そ、そう……………あ、ありがとう……………／＼／」

—————

八幡「ごちそうさま。うまかった。ありがとな」

雪乃「っ……………い、いいえ。別に、その、気にしないでいいわ／＼」

八幡「あーそのーなんだ？またそのうち作ってくれるか？」

雪乃「ええ、そのうち持ってくるわ（やったっ！）」

八幡「んじゃあなーまた部室で」

雪乃「ええっ、また」ニッコッ

八幡「っ……………」（めっちゃかわいい笑顔とか。惚れそうになるレベルだ。てかあれじゃね？俺のこと好きなんじゃね？騙されるな比企谷八幡。あれは雪ノ下のなんらかの陰謀だ。ふうー危なかった。うっかり勘違いするところだった）」

雪乃「（今日の作戦は成功よっ。次はなにをしておアプローチしようかしら）」

part 4

雪乃「はぁ……………」

雪乃「(嬉しさのあまり今日の授業全然集中できなかったわ……………
けれど仕方ないわね。だって比企谷君に褒められたんだもの)」

八幡「うつす」ガラガラ

雪乃「こんにちは」

八幡「スッ

雪乃「あ、あの……………」

結衣「やつはろー」ガラガラ

雪乃「こんにちは。由比ヶ浜さん(由比ヶ浜さんは別に悪いことを
しているわけではないわ。そうよ)」

結衣「ゆきのんやつはろー あ、ヒッキーも」

八幡「よう(あ、ってなんなんですかね、あ、って)」

結衣「そくだゆきの〜ん。今度遊びに行こうよ」ダキッ

雪乃「そ、そうね。行くわ。行くから離れて」

結衣「ヒッキーもね」

八幡「いや、俺はいろいろと忙しいから無理だ」

結衣「ヒッキーが忙しいわけじゃないじゃん　ねえ〜行こうよ〜」
「ダ
キッ

八幡「当たってる当たってる。やばいやばいやわらかいやばいや
ばいやばい」

八幡「わかったから離れる……………」

結衣「やったー」

雪乃「(今明らかに比企谷君の眼が潤っていたけれど。……………！まさか、やっぱりそうかしら。い、いえまだそうと決まったわけではないわ。ない、けれど……………)」

—————

雪乃「今日はこれで終わりました」

結衣「ばいばいっ、ゆきのん　ヒッキー」

八幡「じゃあな」

雪乃「ええ、さようなら」

八幡「んじゃ雪ノ下、鍵よろしくな」

雪乃「あ、あの比企谷君。あの……………」

八幡「なんだ？」

雪乃「い、いいえ。なんでもないわ。」「めんなさい。さようなら」

八幡「じゃあな」

雪乃「はあ……………」

雪乃「プニプニ

雪乃「はあ……………」

雪乃「（比企谷君のあの眼はやっぱりそういつことよね……………」

雪乃「プニプニ

雪乃「（どうして由比ヶ浜さんにはあるのかしら）」

……………

八幡「俺、慎ましやかな胸には興味ないんだ」キリッ

……………

雪乃「ウルウル

雪乃「比企っ……………谷っ……………君……………」シクッシクッ

雪乃「プニプニ

雪乃「シクッシクッ

雪乃「うっ……………比企谷君……………」シクッシクッ

陽乃「(お昼どろだったか聞きに來たら雪乃ちゃんが泣いてる。かわいい)」

陽乃「(どうしよう……………話かけるべき？比企谷君はどっちでもいって言つべき?)」

陽乃「(……………)」

陽乃「(うん、ほっとしつ。そっちの方が楽しそうだし)」

陽乃「(がんばってねっ。雪乃ちゃん)」

雪乃「比企谷君……………」シクッシクッ

part 5

雪乃「」

雪乃「」

八幡「よう」ガラガラ

雪乃「」、「こんにちは……………」

八幡（雪ノ下が罵倒してこない、だと……………一体何があったんだ）」

雪乃「（聞くべきかしら？比企谷君の胸の好みを。けれどそれじゃあ比企谷君に好きって言うてるみたいじゃない……………どうすればいいのかしら……………？）」「モジモジ

八幡「ほんとに何かの病気か？なんなの？そのかわいい動作。もう永遠にそれしてるよ）」

八幡ん？（俺としたことが本を忘れてしまった。教室にあるが、取りに行くの面倒だし、音楽でも聞くか）」

雪乃「」モジモジ

八幡「（おっ、イヤホン発見）」

結衣「やつはるー」

結衣「ってヒッキー何聞いているの？」

八幡「お前に言ってもわからんのが落ちだ」

結衣「またバカにしてー」プクー

八幡「じゃあ由比ヶ浜、バカって漢字でどう書くんだ？」

結衣「バカに漢字なんてないよ　カタカナだよ　ヒッキーの
バーカ」

雪乃「馬で鹿と書いて馬鹿といつのよ由比ヶ浜さん。そのくらい常識なのだから覚えておいた方がいいわよ」

八幡「もう復活ですか雪ノ下さん」

雪乃「もう考えても仕方ないわ……………」

結衣「ポカーン

八幡「はあく、馬鹿がいなくなるとほんとに静かだ。音楽に集中できると」

雪乃「まさか由比ヶ浜さんがあそこまで、その、あれだとは……………」

結衣「それで、ヒッキーは何聞いているの？」

八幡「んあ？お前らリア充には関係のない歌だ。てか、お前らの聞く歌は俺にはあわん」キリッ

結衣「はあ　何それ　キモい　まじキモい　ヒッキーキモ
い」

八幡「キモくて結構。お前らリア充はアニソンとかをキモいとか思ってるだろ」

雪乃「でもそうね。世の中の一般論はアニメの歌などをそう捉えてるものね。偏見よね」

八幡「なんだ雪ノ下？アニソン聞いたりするのか？（こころで罵倒をしてるのが雪ノ下クオリティではなかったのか？）」

雪乃「まだ聞いたことないわ。けれど、聞いたこともないのに偏見は持ちたくないもの。ちなみに私がよく聞くのはクラシックよ」

八幡「さすがは雪ノ下だな（心の底から思うぞ）」

結衣「それで？どうせプリキュアでしょ？ヒッキーキモい」

八幡「プリキュアは純粹でキモい要素なんてない。今聞いているのはプリキュアじゃないし」

結衣「じゃあ聞かせてよ」

八幡「やだ」

結衣「むっきー　もういい　ヒッキーまじキモい　ゆきのん、もう帰るね　ヒッキーのバーカ　「タッタッタ」

雪乃「あなた、ちゃんと謝りなさいよ……………」ハア

八幡「わかってる……………」ハア

雪乃「それで？何を聞いているのかしら？聞かせてもらえるかしら？」

八幡「ん？ああ、わかった。んじゃ、こっちかい」

雪乃「えっ (こ、こいつて…… / / /)」

八幡「なんだよ…… (変なこと言ったか？)」

雪乃「なぜそっちに行くのかしら？」

八幡「イヤホン届かねえだろ」

雪乃「イ、イヤホン……？なぜ今いるのかしら？」

八幡「音出してたら依頼人が来たときに入ってこれないだろ？」

雪乃「あ、ああ、そういうこと……」

八幡「というわけだ。こっちにこい」

雪乃「え、ええ」「トコトコ」

八幡「ほいつ」

雪乃「あ、ありがとう(え？左耳用？そ、そしたら……)」

八幡「(しくった。右耳のを渡すべきだったか。めっちゃ近い……)」

雪乃「(比企谷君の顔がすぐ横に…… / / /)」

雪乃「(え、ええと……………聞こえてくるのは……………)」

ありったけの気持ちで アイシテルってつぶやく

昨日までの想いあふれ サラサラとけてく

これっきりの祈りで 伝わればいいのに

確かめあえる言葉をくれて 神様ありがとう

明日二人は手をのばして

いつもよりも強く握りあう

明日二人は手をのばして

抱き合って キスをして 愛しあう

雪乃「なっ…………… あ、あっ」「カアアア

八幡「ん? どうした? (めっちゃ顔赤いじゃん。勘違いする要素しかないじゃん。どうしよう……………)」

雪乃「ひっ、比企谷君、あ、ありがとう…………… / / /」

八幡「いや、気にするな」

雪乃「そ、それじゃあ、ええと、も戻るわね」

雪乃「え? (じ、地震……………っ、強いわね)」

八幡「え？（地震か、あんま揺れてはいないな）」

雪乃「（えっ、バランスが……………）」

雪乃「キャッ！」

八幡「お、おい雪ノ下！」ダキッ

雪乃「（かかかか、か彼が私を抱きしめて……………）」

八幡「（助けるためとはいえ抱きついてしまった。しかも、なあ……………）」

雪乃「あっ……………なっ……………／／／」カアアア

八幡「おっと、地震が終わったな」

雪乃「そ、そうね……………／／／」

八幡「んーと、まああれだよ。もう時間だし帰ろっぜ？」

雪乃「え、ええ。そ、そうね。それから、その……………」モジモジ

八幡「ん？」

雪乃「あ、ありがとう……………／／／」ウワメツカイ

八幡「き、気にするなよ（ぐっ……………なんなんだよ、この破壊力は……………）」

雪乃「（今がチャンス、よね）お礼をするから、その、ちょっと待つ

てもらえるかしら？」

八幡「お礼なんていって。気にするなって言っただろ？」

雪乃「いいのよ。私がやりたいだけなのだから」

八幡「(そう言って雪ノ下の顔が近づいてくる。そうだ、顔だ)」

雪乃「ノノノ」カアアア

八幡「(雪ノ下の顔がすぐ間近にきて、それで……………」

平塚「おーい、大丈夫だったか？てか、もう時間だぞ？鍵を返しに
こい」

雪乃「ピクッ

八幡「今から返しに行くところですよ(反射的に雪ノ下との距離は
とつた)」

雪乃「ええ、返します(もう少しだったのに…)」

平塚「いや、私はちょっとここでやりたいことがあるからな、鍵は
いい。というか、時間だからとつとと帰れ」

八幡「へーい」

雪乃「わかりました」

雪乃「(んー！いいところだったのに！平塚先生、間が悪いわよ！)」

八幡「帰るか」

雪乃「そうね……………」

雪乃「(うーー、私のせっかくの覚悟が……………」

雪乃「(けれど……………」

八幡「／／／」

雪乃「(彼も少し顔が赤くなっていて、作戦の半分は成功、かしら)」

part 6

雪乃「(それにしても、彼と二人で歩くだなんて、懐かしいわね。あのときはこんな感情、持ってなかったものなのよね)」

八幡「あ、なあ雪ノ下」

雪乃「なにかしら？」

八幡「付き合ってくれ」

雪乃「ええ」

雪乃「(ん？えっ、えっえっ　　なななな、なにをかかかか彼は言うているの　えええっ、どどっ、どっすればいいのよっ　／＼／＼)」

八幡「小町がカマクラの首輪を買ってきてくれたことで、俺にそんなセンスないからさ。悪いな」

雪乃「構わないわ(そ、そういうことね……………)」

八幡「今度の土曜でいいか？」

雪乃「ええ、それで構わないわ」

八幡「つーわけでよろしく。じゃあな」

雪乃「ええ、さようなら」

八幡「(って、なんか雪ノ下をデートに誘ったみたいじゃなーかよ！

なんかすげえナチュラルに誘っちゃったんだけど！／＼／」

雪乃「告白ではなかったとはいええ、その、ででで、デートよ、ねこ
れは／＼／」

――

雪乃「(集合の30分も前に着いてしまったわ。楽しみにしすぎよ
ね。でも、その、比企谷君との、その、デートな、わ、わけだし……
／＼／)」

八幡「おう雪ノ下、早かったな」

雪乃「ひっ　「ピクッ

八幡「(なにその反応かわいいんだけど。あれだよ？勘違いして
襲っちゃっよ？そんなことしねえけど)」

雪乃「こ、こんにちはは比企谷(いきなり話かけないでよ！もっっ！)」

八幡「んじゃ、行くか」

雪乃「ええ、そうね」

* * * * *

雪乃「やっぱり混んでるわね(比企谷君に密着してる！／＼／)」

八幡「そ、そうだな(ちくしょう！雪ノ下の肌柔らけえじゃねーか
！／＼／)」

雪乃「えっ（電車が……）」

八幡「おっ（電車が揺れる。んで、その結果……）」

雪乃「カアアア

八幡「（雪ノ下が俺に抱きつくといつごとが起きるわけです。でも俺は勘違いしない。もてない男子特有の勘違いはしない）」

雪乃「（あわわわわ……ひ、比企谷君に抱きついてる。わざとじゃないとはいえどうするのよ！／＼／＼）」

雪乃「っ……っ……っめんなさい」

八幡「き、気にするな……（なんで顔赤らめてんだよ。自制だ自制。自制をするんだ俺）」

――

八幡「はあ、混んでて疲れた」

雪乃「ええ、そうね」

八幡「お前は平気そうだな」

雪乃「もちろん！比企谷君とのデートですものっ（あの程度で疲れるだなんてさすがは引きこもり君ね）」

八幡「なっ……／＼／＼カアアア

雪乃「？（どうかしたのかしら？）」「キョトン」

雪乃「それよりも早く行きましょう。時間は有限なのよ(比企谷君とのデートなのだから堪能してかないと)」

八幡「あ、ああ、そうだ、な……………／＼／」

雪乃「(ほんとにどうしたのかしら?)」

八幡(動揺しすぎだろ俺！いや、だがあの雪ノ下にあんなこと言われたら……………は！なるほど、読めた。雪ノ下めすごいことか)

—————

雪乃「これなんてどうかしら？」

八幡「んゝいいんじゃないか？」

雪乃「それじゃあ、こっちは？」

八幡「んゝいいんじゃないか？」

雪乃「あなた、さっきから同じことしか言っていないじゃない……………」

八幡「いや仕方ないだろ……………」

雪乃「ならこっちは？」

八幡「それはちょっとなー」

雪乃「こっついづのは嫌なのね。なら今までの比企谷君の反応からして、これがいいと思うわ」

八幡「おお……………（青の小洒落た感じのやつだ。カマクラに似合うかは知らんが、俺がこのデザインを気に入った。なんかこれだけ聞くと俺が付けるみたいになってるな）」

雪乃「いるのは首輪だけかしら？ご飯とかは大丈夫かしら？買えるときにまとめて買っておいた方がいいと思うのだけれど。」

八幡「いや、大丈夫だ、問題ない」

雪乃「そう、なら帰りましょうか」

八幡「おう、そうだな」

――――

雪乃「……………」

八幡「……………」

雪乃「……………」

八幡「……………」

雪乃「（な、何か話さないと。比企谷君と話さないと。私が降りてしまっじゃない……………。というか、今日が一番の告白のタイミングじゃないのかしら？いい、いつ言えばいいのかしら？）」「モジモジ」

八幡（雪ノ下の巧みな技に気がついたからいいものの、気がつかなかったらとんでもないことになってたな。精神的に削る、そもそも雪ノ下が何か最初にしてきたのはそれが目的だったはずだ。そう思えばすべてに合点がいく。なんら難しいことではない。はーよかったー。

思わず勘違いしてーーーーなんてならなくて」「

雪乃「(私の降りる駅……………)比企谷君、さようなら」

八幡「ん？ああここだったか。俺も降りるよ。付き合ってくれた礼だ。一人で帰らすのも悪いしな(雪ノ下も女子なわけで、さらにかわいいからな。何かに巻き込まれる可能性もあるし)」

雪乃「っ…………あ、ありがとう……………／／／(か、かわ、かわいい……………／／／)「カァァァ

八幡「(あ、だめだこりゃ。わかってても削れてく)」

雪乃「(これがチャンスよねっ！)」

part7

雪乃「ソワソワ

雪乃「キヨロキヨロ

雪乃「ポワポワ

雪乃「シユン

八幡「……………何してんだ？ 駅から出てずっとこんな調子で一喜一憂してる。こんなに感情あつたのか雪ノ下」

八幡「なあ、さっきからどうしたんだ？」

雪乃「っ…………… な、なんでも、その…ない、わ……………」

雪乃「さっきから告白の言葉を考えて、それを頭の中で言ってみているのだけれど、全てつられるイメージしかでてこないのはなぜかしら……………」

雪乃「ひ、比企谷君。あなたの、こと、が、好きです！ わ、私と、つき合ってください！」

八幡「わりっ、眼中になかったわ。 すまん」

……………

雪乃「ウルウル」

八幡「なんか泣き出したんだけど　いや、性格にいえば涙目になっただけだ。てかかなり俺が動揺してる。正確を性格にするくらい動揺してる。これは、やばいな」

八幡「なあ雪ノ下」

雪乃「なに…かしら…？」

八幡「悪かったな」

雪乃「えっ？な、なんで？」

八幡「いや、俺と帰りたくなかったからそんなことしてんだろ？（それならそうだと言ってくれればいっそのこと楽になれるしな。いや別に死ぬわけじゃねーけど）」

雪乃「……………わよ」ボソッ

八幡「なん？」

雪乃「そんなことないわよ…」

八幡「ふえん　（なんだこの声どこから出たんだよ　てか、雪ノ下の大声出すとこって見たことなかったな）」

雪乃「そんなこと…ないわよ…」

八幡「いやだっってお前—————」

雪乃「あなたにどうやって告白しようか考えてたのよ！」

八幡「ポカーン

雪乃「プルプル

八幡（……………いや。勘違いするな比企谷八幡。告白するのはあれだ、なんか隠し事してんだな。そつに違いない……………そつだ、そつに違いないんだ）」

雪乃（こ、告白って言ってしまったわ…………… 　　ど、どうすればいいのよこれから……………！）」

雪乃「

八幡「

雪乃「

八幡「

雪乃「

八幡「……………なんの告白だ？隠し事でもしてたのか？」

雪乃「っ……………」

雪乃（彼には……………届かなかったのかしら……………私の……………思い、は……………そんなこと言うなら……………はっきりとつてくれればいいの……………に……………）」
ポロポロ

八幡「今度は本当に泣き出した……この反応は、その、まああれだな。」

……勘違いできねえよ、な。」

八幡「国語で習っただろ？ちゃんと、まあ、文を構成しないと、その、気持ちも伝わらないんじゃないのか？（これ以上の言葉を俺は有していない。あとは目の前の彼女次第だな）」

雪乃「……そう、よね。私らしく、ちゃんと言葉で伝えないと、いけないわね。」

雪乃「（なら、私ははっきりと言葉に！）」

八幡「（落ち着いたか）」

雪乃「すうー……ふうー……わ、私……雪ノ下雪乃は……あ、あなた……比企谷八幡の……ことが……」プルプル

雪乃「（言うのよ。ちゃんと、最後まで！）」

雪乃「比企谷君のことが！好きです!!だ、だから……私と……付き合っ……て……く、ください!!」プルプル

八幡「……」

雪乃「ノノノ」プルプル

八幡「ふうー……はあー……」

雪乃「（どんな結果でも、ちゃんと受け止めるのよ。ちゃんと……）」

八幡「お、俺は――」

雪乃「えっ……………？（ゆ、揺れる……………）」

八幡「なっ……………（結構でけえ揺れだな……………）」

八幡「おい雪ノ下、掴まれ！」

雪乃「えっ、ええ」ギョッ

八幡「これは震度いくつくらいだ？」

雪乃「3は、あるわよ」

八幡「んじゃ、もう少し寄っとした方がいいな」ダキッ

雪乃「あ……………」／／／

八幡「ナデナデ

雪乃「ギョッ

八幡「ナデナデ

雪乃「わ、私は言葉にしたの……………だから……………あなたも言葉にしな……………さいよ……………」ポフッ

八幡（胸に顔埋めて、さらにそこから上目遣い。せこいよなー雪ノ下）ああ、わかった。んとなー、コホン。俺は、比企谷八幡は、雪ノ下雪乃のことが、好き……………だぞ……………」

雪乃「それで？」

八幡「お前意地悪すぎんだろ……………」

雪乃「ふふっ、あなたがそれを言うの？」

八幡「けっ……………だからな、そのな…俺と付き合ってくれ。もちろん恋人とし…て…／／／」

雪乃「70点ね」

八幡「微妙だな」

雪乃「語尾が弱くなっていくんだもの。それはもちろん減点ポイントよ」

八幡「さいで……………」

雪乃「けれど」

八幡「けれど？」

雪乃「恋人としてという部分は、その…プラスポイントよ…／／／」
ボソボソ

八幡「なんて？」

雪乃「なっ、なんでもないわよ！」「プイッ

八幡「(ふっ、まあ加点部分はなんとなくわかる、かな。そんなに顔も耳も、真っ赤にしてたら」

雪乃「だか……ら……また……／＼／」

八幡（おうおう、さらに赤くして。まったくかわいげのあるやつだな）

雪乃「（卑怯よ、ほんとに……いつも、いつも……卑怯なのよ、比企谷君は……）」「モジモジ」

雪乃「あと、それから」

八幡「まだあんの？」

雪乃「私に向かって勉強に關することゝ例えを出すのは愚策よ。そして」

ギョッ

雪乃「生意気よっ」「ニッコッ

八幡「っ………そ、そうかよ／＼／」「プイッ